

東洋學藝雜誌第九號

明治十五年六月廿五日發兌

○人類ノ紀元 (前號ノ續) 松下 丈吉

余輩ハ前號ニ於テ、漠然人類ノ舊キ所以ヲ示シ、畧ホ之ヲ證明スルノ事實ヲモ擧ケタレハ、此ヨリ西哲ノ考究ニ據テ、確然ソノ年代ヲ決セン、瑞西ノ湖水住居、及丁抹ノ介墟ノ如キハ、姑ラク措テ論セス、今ハ唯タホルノル氏カ、埃及ニ於テ爲シタル試驗ト、法朗西アツベウ井ユノ事實ヲ掲クルヲ以テ足レリトスベシ

先ツ第一ニホルノル氏カ、埃及ノ試驗ヲ記サン、ナイル河ノ年々漲溢シテ、其河溪ニ泥土ヲ敷キ、埃及國ノ豐饒ヲ引起スハ、誰モ皆ナ之ヲ知レリ、依テ一千八百五十一年、ホルノル氏ハ其泥土ノ漸ク増加スルノ割合ヲ決セント欲シ、メソフヒスニ在ル、ラミーシース二世ノ石像ヲ檢シテ、其ノ十フヒート六ト四分ノ三インチハ全クナイル河層ノ中ニアルヲ知レリ、假ニ十四ト四分ノ三インチハ、之ヲ建ルノ初メ、既ニ地下ニ埋メタリト爲スモ、九フヒート四インチハ、必スナイル河ノ泥土ノ、漸ク相積リタルモノニ外ナラサルヘシ、然ルニラミーシースハ、耶蘇紀元前千

三百六十一年ノ頃、埃及ヲ支配シタル人ナリト云ヘハ、千八百五十一年迄、三千二百十二年ノ星霜ヲ經タリ、乃チナイル河層増加ノ割合ハ、百年ニ付三インチ半ナリトス、斯クテホルノル氏ハ處々ニ井ヲ鑿チテ之ヲ試ミタルカ、就中右ノ石像ニ近ク三十九フヒートノ地下ニ於テ、土器ノ一片ヲ見出セリ、即チ前ノ計算ニ依ルニ、大凡ソ一萬三千年ノ舊キヲ示スモノナリ、サレハ此時ニ當テ、器具ヲ造ルノ人類アリシヲ、亦タ辯ヲ埃タス、

グーセ、ド、ペルテ氏ハアツベウ井ユニ近キ、ソナムノ河溪ニ於テ、始メテ舊石器時代ニ屬スル石器ヲ發見セリ、爾後一書ヲ著ハシテ、自ラ漂積時代ノ地層ヨリ、人類ノ器具ヲ發見シタルヲ主張シタレトモ、初メハ誰レ、信スル者モナク、却テ氏ヲ目シテ狂人ト爲セリ、然ルニ千八百五十九年フウルコーノル氏カアツベウ井ユヲ過キテ、同氏カ採集ノ標品ヲ檢査シ、歸英ノ後、其發明ノ忽ニスヘカラサルヲ傳ヘシヨリ、俄ニアツベウ井ユノ地ハ、學者ノ集ル所ト爲リ、頗ル諸氏ノ考究ヲ經テ、漂積時代ニ屬スル、地層中ヨリ石器ヲ掘リ得ルヲ確然疑フ可ラサルニ至レリ、由是

觀之、既ニ漂積時代ニ於テ、アツベウ井ユノ地ニ一種ノ人
民ノ住居セシヲ推テ知ルベシ。

サテ上ノ漂積層成立ノ源因ヲ案スルニ、已ニ今日ニ於テ
ハ、之ヲノアノ洪水ニ歸スル者アルヲ聞カス、現時ノ地

質學者ハ、大概皆ナ漂流ノ氷塊ニ歸スルカ如シ、然ルニ氷
塊ノ漂流シタル時期、即チ氷田時期ハクロール氏カ、地球

軌道ノ心^{エケヒソトリシチ}差率ノ變更ヲ計テ、之ヲ算定セシモノニ依ル

ニ、今ヲ去ルヲ殆ント廿一萬年ナリ、此說果テ是ナラハ、ア

ツベウ井ユノ人種ハ、既ニ廿一萬年ノ古ヘ、恰モ今日ノ「エ

スケモ」ト同シク、氷雪ノ中ニ棲息シ、野獸ヲ逐テ日ヲ送

リシヲハ、敢テ疑フヘカラス、

且ガイキー氏カ、諸大河ノ觀察ニ因テ、年々ソノ陸地ヲ磨

滅シ、土砂ヲ海中ニ吐出スルノ分量ヲ決定シテ、一國ノ面

積ノ損失ヲ測リ、假ニ河溪ヲ以テ平野ノ九倍ヲ消滅スル

モノト見做シテ、測定セラレタルモノニ依ルキハ、河溪ハ

年々千二百分ノ一ヲヒートニ均キ土地ヲ損シ、平野ハ一

萬〇八百分ノ一ヲヒートヲ失フ者トス、サレハ今之ヲ以

テソノム河溪ニ應用セシニ、其深サ殆ント二百ヲヒート

ナリト云ヘハ、此算定ニ依ルモ、アツベウ井ユノ漂積層ハ
二十四萬年ノ舊キヲ示ス者ナリ、此ノ如ク全ク相異ナレ
ル計算ニ依テ、畧ホ同數ノ年代ヲ得ルハ、蓋シ亦タ偶然ニ
非ス、

余輩ハ已ニ讀者ト共ニ二十四萬年ノ太古ニ溯リテ、確ニ
人類ノ蹤跡ヲ認メタリト雖モ、今一步ヲ進メテ、此等ノ大
數モ未ダ以テ其紀元ヲ量ルニ足サルヲ論セン、夫レ哺
乳動物中、人ト造構ノ相似タル者ヲ以テ猴トス、就中舊世
界ノ猴ハ最モ人ニ近キ者ナリ、世或ハダーウ井ノ氏カ進
化ノ說ヲ誤解シテ、直ニ舊世界族 (catarrhine group.) ノ
猴ヲ以テ、人類ノ始祖ト爲スモノアレントモ、是レ大ナル
誤謬ナリ、現今ノ解剖學者ハ、皆ナ人類ノ此ノ猴族ヨリ出
タルヲ信セサルノミナラス、コノ二者ハ全ク同祖ヨ
リ出タル最モ近キ親族ナルヘシト云ヘリ、然ルニラルテ
氏ハ千八百三十七年、法朗西ノ南方ニ於テ、「マイヲシ」
ノ地層中ヨリ、始メテ舊世界族ノ猴骨ヲ發見シ、尋テ千八
百五十六年セーント、ゴーデンニ於テ、再ヒ同時代ノ地層
中ヨリ、猿猴ノ一種屬ヲ得タリ、故ニ若シ人類ト舊世界

族ノ猴トハ、全ク同祖ヨリ出タル親族ナリトセハ、必ス其時代ニ於テ、人類モ亦タ生存シタルヲナラン、何トナレハ共ニ同源ヨリ相分レテ、綿々今日迄絶サルモノカ、其時代ニ於テ、唯タ其一方ノミ存在スルノ理由、萬之アラサレハナリ、加之タルデー氏ハ實ニ「マイヲシ」ノ「マイヲシ」層中ヨリ燧石ノ雷斧ヲ得タリト云フ、愈々以テ所論ノ鞏固ナルヲ徵スルニ足レリ、

前ニ掲ケタルクロール氏カ計算ニ依レハ、「マイヲシ」ノ時代ハ、今ヲ去ルヲ大凡ソ二百四十六萬年ナリ、然リト雖モ「マイヲシ」ノ時代ニハ、既ニ人類ノ生存シタルヲ、前ニ言フカ如クナルヲ以テ、余輩ハ「イヲシ」ノ「イヲシ」實ニ人類初出ノ時代ナルヘシト思考ス、而テ「イヲシ」ノ時代ハ、又前ノ計算ニ依ルニ、今ヲ去ルヲ大凡ソ二百六十二萬年ナリ、故ニ曰ク人類ノ始メテ猴様ノ上祖ヲ離レ、今日ノ形狀ニ進ミタルハ、今ヲ去ルヲ大凡ソ二百六十二萬年ヨリ、二百四十六萬年ノ間ナルヘシト、

○教育學講セサルヘカラス 中川 元
誰カ教育學ヲ學問ニアラストスル歟、抑々如何ナレハコ

レヲ學問トナスカ、凡ソ天地人間ノ事物、皆以テ學問ニ非サルハ無キニアラスヤ、然レハ則チ教育ノ事モ、亦學問ナリ、蓋シ識者カ宇宙ノ事物、及ヒ其理由ニ就キ、考究セシモノヲ以テ之ヲ一學問トセシヨリ、百般ノ學事殊更ニ其主トスル所ヲ定ムト雖モ、其元素ハ固ヨリ陰然トシテ未發ニ存在シテ、今日ニ異ナラサリシナリ、然レモ世運ノ進歩ニ從ヒ、事物互ニ權衡ヲ得ントスル勢アルヨリシテ、竟ニハ部類ヲ精密ニシ、其輕重ヲ較ヘ、コヽニ研究者索スル所ヲ深フスルハ、勢ノ由テ然ラシムルモノナレハ、今日ニアリテハ、教育學モ亦最注意シテ、講究スヘキハ照々トシテ天日ノ如クナラン、

夫レ學問上ノ新發明モ、人事、交際、風俗、習慣ヨリ生スル事實論理ト、共ニ事理明晰ナラサル以上ハタヽニ功ヲ奏セサルノミナラス、却リテ害ヲ招クニ至ラン、故ニ苟クモ事物ノ以テ人ニ傳フヘキモノハ、充分ナル注意ヲナシテ、其目的ニ達セシム可シ、是レ教育學ノ有用ニシテ、且ツ須要ナル所以ナリ、サレハ教育學ハ、學問上ノ運轉、方法如何ヲ主トシ研究スルモノニシテ、我邦ニ於テモ、決シテ其

資ニ乏シカラサルモ、曾テ一定ノ規律ナキヲ以テ、之カ良法ヲ講スルニハ、宜シク他國ノ實例ヲ參照酌量シテ、學問ノ進路ヲ援ケ豫メ期スル所ノ幸福ヲ求メサル可カラズ、故ニ以下外國ノ例ヲ擧ケン、

歐米各國大學校ニ於テ教育學ノ教授

千八百八十年同八十一年學年冬期獨乙大學校ニ於テ教授セシ教育學ノ教授書、及ヒ其人名、

伯林ラザリコス氏ブランシツプ、ド、ラ、プシヨロシ、デ、ナシヨ、ベ、ダ、ゴ、シ萬國精神學ノ原理、教育學、ポールセ
ン氏教育學

ボンジ、ボナメイエ氏教育學ウ、オ、ル、フ、ベル、グ、氏學校衛生

ブラッンスベルグクラウセ氏教育學

ブレスロークラウスキ氏耶蘇教々育學歷史

エルランゲンデ、セスウ井ツ氏教育學

ギエーセンチーレル氏教育史

ゴーチンゲンクリーザエル氏教授原理、スコベル教授

レーン氏耶蘇教々育學、ソオプ氏教育學校ノ教授

ハールクラメル氏教授法則、神學校ニ於ケル教育教

練

ハイデベルグバーセルマン氏教育史、小學校教授ノ教授
ユリーグ氏中學ニ於ケル教育學ノ教授

イエーラケ、ヴー、ストイ氏教育學全科、法則及文學、精神學、

ヘルバルトノ傳及其主說、教育學校ニ於ケル理論實地教

練、ハストイ學事中興以來ヨリヘルバルト氏迄ノ教育學

歷史

キーエルツハローフ氏教育學校ニ於ケル教授

コーニグスベルグジヤマビー教育學

レプシーグ教育學ノ通常教師ナルマシユス氏教授ノ原理

第十六紀第十七紀ニ於テノ學校及其組織、教育學校ニ於

ケル教授、ホフマン氏教育學及其歷史、實地教授、及學校

巡視

ストロンペールシーレル氏、エクステン氏教育學校ノ管

理、デーリッツ氏地理教授ノ法則

モニークバーク氏教育史及教育學理論、ウエギエスブレー

ク氏「セミ子ルガストワール」教育學ノ部

モノステルハガーマン氏近世教育史

チユゼンゲンウエイス氏平民學校ノ教授、ウエゴーベル氏教

育學プフエイデレル氏ルーワーノ社會及政治上ノ教育學理論、スビーター氏教育史理論ニ加フルニ教育學ノ討論

|| 埃國及匈牙利

維納ポール氏教育學、リケル氏「ゲタクテツクバストラール」シウレール氏教育及教授ノ理論、ゾオイト氏教育學全論、教育學校教練

ランベルグゴスラーク氏教授學、クセルカウスキー氏中學教育學、

ペストロビーク氏近世教育學及其歷史、カマン氏歐洲各國ノ教育、第十八紀以來ノ教育史

クラウセンボルグフェルノリー氏教育全書、法國教育文學

|| 瑞西

パールシイベーク氏教育學理論辨、教育學校、ゴエリング氏教育學、教育教練カントノ教育學

ベルヌリユエック氏教育學、教育學教練、ルーメー以來ノ教育學史ステルヌ氏教育學史上ノ教育教練

ジュリクアヴナリユス氏教育學、通常教師、フンジケール氏、フェール氏教育史ヒユグ氏中學校數學教授ノ法則

既ニ近頃米國ニ於テハ、ミナガン、ミスーリー、イオウア、英

國ニ於テハ、シントアントラエギンボルク、龍動府等ノ、諸

大學校ニ於テ、教育學ノ教授ヲ設ケシハ世ノ知ル所ナリ、

佛蘭西ノ如キハ、高等、中等、初等、師範學校アリト雖モ、未

タ大學科目中、教育學ノ設ケナキハ、實ニ欠典ト云フヘシ、

蓋シ教育社會中、或ハ此論ヲ出スアルモ如何セン政治ノ

變換、頻々トシテ起リ、他ニ論者アリト雖モ、焦眉ノ急ニ

非サレハ、之ヲ他日ニ讓リ、其意ハ之ヲ繼述スルモ、未タ

其期至ラサルニ、早ク既ニ其黨覆リ、他黨コレニ迭ルモ、

亦前日ノ如クニシテ、漸ク數年ヲ經過シ、昔日ノ理論初メ

テ實地ニ行ハルノ勢ハ、今日ニ至リテ、現ハレタルカ如

シ、何トナレハ、開進主義ノコトキ、多ク法國ヨリ其源ヲ

發セシモノアリト雖モ、却リテ他國ニ行ハレシ結果ヲ見

テ、初メテ愕然コレヲ實施スルカ如キ有様、一ニシテ足ラ

サレハ、教育學ノ如キモ惟フニ數年ヲ出スシテ、大學科目

ノ一トナルヘキハ、敢テ疑ヲ入レサルナリ

○堯舜ハ孔教ノ偶像ナル所以ヲ論ス

井上 圓了

余嘗テ史記ヲ閱シ、五帝本紀ヲ讀ムニ及ヒ、大ニ感スル所アリ、堯舜ノ今ヲ距ル已ニ四千餘年ニシテ、開闢ヨリ世ヲ隔ツル、僅ニ數十代ニ過キス、而シテ禮樂典刑ノ制、治亂興廢ノ狀、秩然トシ備ハリ、仁義忠孝ノ跡、換乎トシ觀ルヘキモノアリ、凡ソ世ノ開クルヤ、野ヨリ文ニ進ミ、蠻ヨリ華ニ赴クハ自然ノ理ニシテ、泰西諸邦ノ史ヲ檢スルニ、一トノ然ラサルハナシ、獨リ支那ニ至テハ、上代文物ノ盛ナル、近古ノ遠ク及ハサル所、是レ文ヨリ野ニ降ルモノト云ハサルヲエス、然レ夏殷ノ本紀ヲ讀ムニ及ヒ、其二紀中禹湯ヲ除クノ外、唯、歷代ノ帝號ヲ記スルノミニシテ、其事跡ニ至テハ、毫モ見ル所ナキヲ以テ、余稍、之ヲ怪ム、周以後ノ紀事ヲ讀ミ、春秋戰國以來、歷世治亂存亡ノ跡、始テ瞭然タルヲ見テ、乃チ堯舜二紀ノ信スヘカラサル所以ヲ知ル、夫レ人智ノ未ダ開ケサルヤ、唯、耳目ニ觸ル、モノヲ考フルノミニシテ、見聞ノ外ヲ推究スル知力ナシ、所謂形以下ノモノヲ知リ、形以上ノ理ヲ覺知スル能ハス、其進ムニ從ヒ漸ク有形ヨリ無形ニ入り、實物ヨリ理論ニ及ブ、猶ホ人ノ生長スルカ如シ、其幼時ニ當テハ、縮緬ノ白衣ヨリ木綿ノ

赤帶ヲ擇ヒ、一圓ノ金貨ヨリ一錢ノ銅貨ヲ取ル、是レ唯、物ノ外形ヲ見テ、其實價ヲ考ヘサレハナリ、知力ノ増進スルニ及テ、始メテ物ノ良惡ヲ辨シ、損益ヲ知ルニ至ル、世ノ野蠻未開ニ於ル亦然リ、文字ノ起源ヲ尋ルニ、動詞ハ名詞ノ後ニ起ル、是レ人ノ有形ノ体ヲ知ルハ、無形ノ理ヲ考フルヨリ先キナレハナリ、故ニ世ノ上古ニ當テハ、縱令ヒ一二ノ識者アリテ、萬世不易ノ真理ヲ發見スルモ、之ヲ世人ニ了知セシムル能ハス、是ヲ以テ、諸教ノ開祖ノ如キハ、世ノ未開ニ出テ、教理ヲ世人ニ説テ、以テ世ノ無常ヲ戒メ、人ノ作惡ヲ禁セント欲スト雖モ愚民ノ多キ其理ヲ解知スル能ハサルヲ恐レ、乃チ之ヲ物形ニ寓シ、偶像ヲ造ル、石ヲ刻シテ曰ク、神ナリ木ヲ彫シテ曰ク、鬼ナリ、十目ノ像ヲ作テ曰ク、是レ人ノ罪惡ヲ洞視スル神ナリト、千手ノ圖ヲ畫テ曰ク、是レ善人ヲ救助スル佛ナリト、猶ホ人民ノ其神力ヲ疑ハソコヲ恐レテ曰ク、飢寒病患ハ、惡鬼ノナス所、飲食衣服ハ、善神ノ與フル所、喜ベハ賞アリ、怒レハ罰アリト、以テ善惡ノ果報ヲ戒ム、或ハ天堂ハ上ニアリ、地獄ハ下ニアリト云フモ、又唯、人心ノ向フ所ヲ定ムルノミニ、是レ宗教ノ起

ル所以ナリ、在昔希臘並ニ埃及人ハ、數種ノ偶像ヲ奉シ、比

古史ニ徵シテ、以テ其教ノ信ヲ示シ、且ツ其本体ヲ定メン

ル所以ナリ、在昔希臘並ニ埃及人ハ、數種ノ偶像ヲ奉シ、比耳士亞人ハ、太陽ヲ拜シ、或ハ山川ヲ祭リ鳥獸草木ヲ念信スル等、皆人文未タ開ケズシテ、無形ノ眞理ヲ覺知スル能ハサルヲ以テ之ヲ有形ニ寓シテ奉信スルニ過キズ、

余史記ヲ讀ミ、春秋戰國ノ世ヲ考フルニ、人民文事ヲ修メズ、學藝ヲ研カズ唯、攻戰ヲ事トシ、私利ヲ營ミ制度法律ヲ顧ミズ仁義ノ大道ヲ知ラズ、文教將ニ地ニ墮チントス、孔子此時ニ生レ、人ノ利欲ニ奔ルヲ惡シ、人道ヲ忘ル、ヲ憂ヒ、德教ヲ設ケテ、之ヲ民間ニ布カント欲ス、然レモ當時天下ノ民、多ク頑愚ニシテ、之レニ無形ノ眞理ヲ語ルモ了覺スル能ハザルヲ恐レ、之ヲ有形ノ偶像ニ寓セント欲ス、然レモ戰國ノ人タル、唯、一世ノ名利ニ奔リテ、來世ノ苦樂ヲ顧ミルモノナキヲ以テ、之レニ死生禍福ヲ告クルモ、其奉信ヲ得難キヲ知り、乃チ神佛ヲ設ケズ、來世ヲ語ラズ怪力亂神ヲ去テ、聖人君子ノ教ヲ天下ニ施サント欲ス、故ニ其教タル神ニモアラス、佛ニモアラス、人ノ人タル道ニシテ、又人ノ今世ニアリテ、之ヲ行ヒ之ヲ全フスルヲ得ルモノナリ、猶ホ或ハ人ノ之ヲ疑ハソコヲ恐レ、一二ノ例ヲ

古史ニ徵シテ、以テ其教ノ信ヲ示シ、且ツ其本体ヲ定メント欲シ、史ヲ探リ、堯舜ナルモノヲ得タリ、當時其史傳世ニ存スルモノ少ク、又人ノ之ヲ知ルモノ稀レナルヲ以テ、之ヲ呼テ聖人ト稱シ、教主ト定ム、遂ニ其惡ヲ除キ、其善ヲ補ヒ、邪ヲ捨テ、正ヲ取り、百方修飾シテ、聖人ヲ裝成ス、孟子尋テ起リ、又之ヲ潤色ス、君臣父子ノ義、孝悌忠信ノ道、皆此二人ニ寓ス、堯ノ舜ヲ遇スル、舜ノ堯ニ對スル事跡ヲ引テ、以テ君臣ノ義ヲ示シ、舜ノ父母並ニ兄弟ニ接スル行爲ヲ掲ケテ、以テ孝悌ノ道ヲ顯ハス、堯舜ハ、孔孟ヲ待テ始メテ、完全ノ聖人トナルモノアリ、孔孟二子微セバ、堯舜此ノ如ク聖主明君ナルニアラス、父母兄弟此ノ如ク頑嚚驕傲ナルニアラス、瞽瞍ノ頑、母ノ嚚、象ノ傲ナル皆舜ノ至孝ヲ顯サ、爲メニ孔孟ノ増飾スルモノナリ、果シテ然ラハ、孔孟ノ教ヲ設クル方便ヲ用フルモノト云ハサルヲエズ、

古來支那人智至テ淺ク、學極テ疎ナリ、故ニ人ノ說ヲ聞ケハ、地ト時トヲ論セズ、直ニ之ヲ信スルノ風アリ、愚ノ至リト謂フヘシ、夫レ人情風俗ハ、地ノ遠近、世ノ古今ニ從ヒ、異同ナキ能ハス、故ニ史上ノ事跡ヲ論セント欲セバ、先ツ其

地ト時トヲ考ヘザルベカラズ、抑、堯舜ノ孔子ニ先ツ千有餘歲、世道ノ變遷一口ニアラス、風俗隨テ改マリ、人情亦移ル、一ハ上古野蠻ノ世ニシテ、一ハ中世半開ノ時ナリ、豈之ヲ同日ニ論スヘケンヤ、余聞ク、堯ノ宮殿、土階三等、茅茨不剪ト、之ヲ孔子ノ時ニ論スレハ、天子ノ質素驚クベシト雖モ、之ヲ堯舜ノ世ニ攷フレハ、人民多ク巢居野處シテ、家屋ヲ設クルモノ甚タ少シ、而シテ堯獨リ土階三等ノ宮室アルハ、奢侈ヲ極ムルモノト云ハサルヲエズ、又聞ク、舜耕歷山、漁雷澤、陶河濱、作什器於壽丘、就時於負夏ト、之ヲ今日ニ考フレハ、一人ニシテ諸業ニ涉ル、舜ノ勞苦驚クヘキニ似タリト雖モ、之ヲ古代ニ論スレハ、人民未タ農工商ノ別ナク、分業ノ法ヲ知ラズ、井ヲ鑿テ飲ミ、田ヲ耕シテ食ヒ、昨ハ工トナリ、今日ハ商トナリ、一人ニシテ諸業ヲ兼ヌルハ、上古一般ノ風俗ナリ、何ソ獨リ舜ノミ然ラン、或ハ曰ク、道遠テタルヲ拾ハズ、夜戸ヲ鎖サズト、是レ又人民ノ寡欲驚クヘキニ似タリト雖モ、其人實ニ欲ナキニアラス、外物ノ以テ欲ヲ引クベキナケレハナリ、男女道ヲ同フセサルハ、男女ノ懸隔非常ニシテ、男ノ女ヲ視ル、禽獸ノ如クナレハナ

リ、耕者畔ヲ讓リ、漁者居ヲ讓ルハ、耕スヘキ地多ク、漁スヘキ處乏シカラザレハナリ、然ルニ孔教ヲ奉スルノ徒、更ニ世ノ古今、人ノ文野ヲ問ハザルノ甚キヨリ、堯舜ノ風俗ヲ以テ、萬世ニ傳ヘント欲スト雖モ、苟モ時ト勢トヲ考フレハ、堯舜ノ道タル孔孟ノ世人ヲ導ク一時ノ方便ニ出デ、永世不變ノ法ニアラサルヲ明カナリ、人或ハ云フ、堯舜ノ世、孔孟ノ時ト異同ナシト、余爰ニ一例ヲ舉ケテ、其惑ヲ解カン、傳ニ曰ク、堯二女ヲ以テ舜ニ娶スト、堯ハ一天萬乘ノ天子ニシテ、舜ハ布衣ノ賤民ナリ、之レニ女ヲ與フルハ、君臣ノ序ニアラス、縱使ヒ之レニ娶スモ、一女ヲ以テスヘシ、而シテ二女ヲ與フルハ、夫婦ノ禮ニアラス、此二者、共ニ之ヲ孔孟ノ世ニ考フレハ、人倫ヲ亂ルノ大ナルモノナリ、然レモ堯舜ノ世、蒙昧野蠻ニシテ、君臣ノ懸隔孔孟ノ時ノ如ク甚シカラス、婚姻ノ禮、又至テ疎ナリ、故ニ敢テ咎ムルニ足ラス、其他二紀中、記スル所ノモノヲ見ルニ、其人情風俗ノ朴質疎野ナル、孔孟ノ時ト同日ノ比ニアラザルナリ、凡ソ事物ノ地ト時ニ從テ變遷スルハ、止、人情風俗ニアラ

ズ、倫常ノ大道モ、異同ナキ能ハズ、例ヘバ、東洋ハ夫婦有別
 ヲ以テ禮トナシ、西洋ハ男女同權ヲ以テ法トナス、我邦ハ
 天下ハ一人ノ天下トス、米國ハ天下ハ天下ノ天下トス、或
 ハ唯、父ノ命是レ從フヲ以テ孝トナスアリ、或ハ父ニ爭諫
 スルヲ以テ孝トナスアリ、堯舜ハ其子ヲ捨ツルヲ以テ父
 子ノ仁トス、湯武ハ其君ヲ弑スルヲ以テ君臣ノ義トス是
 レニ由テ之ヲ見レハ堯舜ノ世ノ仁義忠孝ナルモノ、孔孟
 ノ時ト異同ナシト云フヘカラス、宜ク先ツ堯舜ノ時ト勢
 トヲ考テ而シテ後論スヘシ、孔孟ノ徒、此理ヲ察セスシテ、萬
 世人ヲシテ堯舜ノ道ヲ行ヒ、堯舜ノ法ヲ守ラシメントス、
 時勢ノ變遷ヲ知ラサルノ甚シキト云フヘシ、
 抑、堯舜ノ世タル、伏羲ヲ去ル數十世ニ過ギズ、其間數千
 百歳ヲ隔ツトアルモ、古史ノ妄誕信スヘカラス、蓋シ伏羲
 始メテ書契ヲ作りテ、結繩ノ政ニ代フト雖モ、文字文章ノ
 未タ全ク備ハラサルヤ明ナリ、既ニ文字アルモ、未タ文章
 アラス、既ニ文章アルモ、未タ史籍アラス、既ニ史籍アルモ
 未タ治亂興廢ノ跡ヲ考フルニ足ラズ、堯舜ノ世已ニ史籍
 アルモ、僅ニ帝號年代ヲ記スルノミニテ、事跡ノ詳ナル攷

フヘカラス、而シテ其成敗存亡ノ狀、后世ニ傳ハルモノ、人ノ
 言語ニ存シ、或ハ後人ノ假託ニ出ツルモノ多シ、孔孟ノ徒
 其餘ヲ承ケテ、之ヲ増補裝飾シ、以テ世ニ傳フ、故ニ堯舜禹
 湯文武ヲ除クノ外、歷代ノ帝王ハ、史上唯、其名ヲ知ルノミ
 ニテ、其事跡ヲ考フヘカラス、而シテ春秋戰國以後、史籍始テ
 備ハルハ、孔孟其他ノ諸子起テ之ヲ講究スレハナリ、
 或ハ謂フ、堯舜二紀ハ、尙書ニ據ル、故ニ信ヲ置クヘシト、曰
 ク否、二紀載スル所、悉ク尙書ニ本ツクニアラス、孔孟ノ論
 スル所、亦尙書ニ見ヘザルモノ多シ、且ツ尙書ハ古代ノ遺
 書ニシテ、歷年幽遠殘缺多シ、孔子其惡ヲ除キ、其善ヲ補ヒ、
 修飾シテ、以テ世ニ傳フ、故ニ堯舜二典モ信據シ難シ、孟子
 云ハズヤ、盡ク書ヲ信ゼハ、書ナキニ如カズト、若シ夫レ二
 典中倫常ノ大道ハ、孔子ノ偽作ニアラストスルモ、未タ以
 テ盡ク信スヘカラス、何者、古代文字ノ少キニ當テ、一字ヲ
 以テ數語ニ轉用スルコトアリ、喩ヘハ樂ノ字ノ如シ、音樂喜
 樂好樂ノ三義ヲ有ス、或ハ又本紀中黃帝熊羆貔貅羆虎ヲ
 教テ炎帝ト戰フコトアリ、熊羆等ハ熊羆ニアラズシテ、勇士
 猛卒ヲ云フ、是レニ由テ之ヲ考フレハ、堯舜ノ時ノ仁義忠

孝ノ字、孔子ノ時ト其義ヲ同ウシ、其用ヲ等フスルモノト云フヘカラス、堯舜ノ仁ト稱スルモノ、鳥獸ヲ憐ミ、草木ヲ愛スル等ノ小仁ナルモ計リ難シ、是レ古書ノ信スベカラサル所以ナリ、

斯ク論シ來ルモ、余敢テ堯舜ハ孔孟ノ假リニ設クルモノニシテ、其實ナキモノト云フニアラス、又歴代ノ帝王ノ如ク、凡庸ノ君主ナリト信スルニアラス、然レモ孔孟ノ徒ノ如ク、古今無比ノ明主完全無缺ノ聖人ト稱賛スルニアラス、唯堯舜ハ野蠻未開ノ君主ニシテ、之ヲ古代ニ考フレハ、稍良主ト稱スヘキノミニテ、決ノ開明ノ世ノ明君ニアラス、但孔孟ノ徒カ百方之ヲ修飾裝成シテ、萬世不易ノ聖君明主トナシ、以テ世人ヲ導クノ方便ニ用フルモノニ過ギス、故ニ余曰ク、堯舜ハ孔教ノ偶像ナリ、又曰ク堯舜ハ人造ノ聖人ニシテ、天然ノ聖人ニアラスト、

井上巽軒曰、余カ東洋哲學史儒學起原ノ處ニ、堯舜ハ孔孟カ曉々スル程ノ大聖人ニアラサルヲ論シタルカ、今此篇ヲ讀ムニ、亦其意アリ、而シテ其堯舜ハ孔教ノ偶像ナリト云フガ如キハ、實ニ翻案ノ妙アリ、讀者勿々ニ

看過スル勿レ、

○支那紙幣史畧 (前號ノ續) 平沼淑郎

第二 會子

紹興元年、婺州ノ屯駐ノ請願ニ因リ、見錢關子ヲ印造ス、蓋シ其地舟楫通セス、錢重フシテ運輸ニ難キニ由ルナリ、商估關子ヲ以テ、權貨務ニ至リテ錢ヲ請ヒ、又茶、鹽、香貨等ヲ得ンコト願フキハ、州縣之レヲ受給スルノ權ヲ有セリ、是際本末抑配ヲ免シタルニ、州縣權貨務ノ吏員、僅ニ日納三分ノ一ヲ以テ之レヲ償フ、人民皆ナ嗟怨セサルハナシ、六年二月、交子務ヲ建テント詔シタルニ、群僚其不可ナルヲ論シテ曰ク、朝廷關子ヲ發行シテヨリ、官吏其意ノ在所ヲ知ラス、大ニ其所置ヲ誤ルコトアリ、今ヤ官庫ニ本錢ノ貯蓄ナクシテ、復々又々交子ヲ發セント欲スルモ、民ノ信用厚カラサルヲ奈セント、遂ニ詔ヲ罷、權貨務ヲシテ見錢ヲ樁染シテ、關子ヲ印造セシム、二十九年又々關子ヲ印造シ、淮西、湖廣、ニ關子八十萬緡、淮東ニ四十萬緡ヲ交附シ、三年ヲ以テ流通ノ期限トナシ、其第二年ニ於テ、銅或ハ銀ノ中、半ハ入納セシム、三十年戶部侍郎錢端禮、會子ヲ發

シ、見錢ヲ左藏庫ニ輸シテ、會子ト交換セシム、三十二年十二月、會子贗造ノ刑ヲ定ム、是時ニ當リ、會子ヲ印造スルニハ、監吏印ヲ分押シ、每一萬道戶部覆印ス、其紙ハ徽州州ニ取ル、續テ又々成都、臨安ノ兩府ニ於テ造ル、其行ハルハ初メハ、兩浙地方ニ在リ、後チ又々淮浙、湖北、京西ニ行ハル、亭戶鹽本並ニ見錢ヲ用ウルノ外ハ水路不通ノ處、皆ナ會子ヲ通融セシム、沿流ノ州縣ハ、錢會ヲ半用セシム、民間ノ田宅、牛畜、車船ノ典賣皆ナ、此例ニ倣ヒ、又々全ク會子ヲ用ウルモ苦シカラサルノ令アリタリ、孝宗降興五年、會子務ヲ江州ニ置ク、乾道二年左司諫陳祐上書ノ曰ク、會子之弊出、內庫及南庫銀一百萬兩收之、三年度支郎唐瑑ノ上言ニ因ルニ、紹興三年ヨリ乾道二年ニ至ル七年ノ間、會子ヲ印造スルヲ二千八百餘萬道ノ多キニ至ル、同年十一月十四日以前ニ授受スル所口、一千五百六十餘萬道ナレハ、合セテ四千三百六十餘萬道ナリ、又々現ニ官司ニ在ルモノヲ除キ、民間ニ通融スルモノ、九百八十萬道アリ、シトイフ、十一月十四日ヨリ三年ノ一月六日ニ至ル迄收兌スルニ、共ニ繳進スルモノ百十八萬九千餘貫ニシテ、尙ホ八百餘

萬貫ノ未タ收兌セサルアルナリ、是時ニ當リ、州縣民戶ノ會子ヲ輸納スルヲ許サス、故ニ其價值頓ニ挫折ス、乃チ會子五千道ヲ權貨務ニ附シ、民ヲシテ舊會子ト兌換セシム、十二月ニ至リ、別ニ五百萬ノ會子ヲ印造シ、破損セシモノト交換セシム、其法破損シタル會子、一貫ニ百錢ノ比例ナリ、四年又々一千萬貫ヲ印造シ、新舊相換ヘシム、即チ三歲一界ノモノナリ、蓋シ舊會ノ毀抹截鑿セシニ因ルナリ、淳熙三年第三四界ノ期限ヲ、今三年間展延シ、又々會子庫ニ於テ、二百萬ノ會子ヲ印造ス、當時ノ統計ニ據ルニ、戶部ノ歲入一千二百萬、半ハ會子ニシテ、南子ノ兌換セルモノ四百萬、外ニ流通セルモノ、二百萬ニ止マル耳ナリ、光宗紹寧元年、詔シテ第七八回ノ期限ヲ三年間展延ス、寧宗慶元々年、詔シテ會子ノ額ヲ限リテ、三千萬トナシ、其餘ハ更ニ増造スルヲ許サス、是時ニ當リテ、紙幣ノ制度大ニ壞レ、根朽チテ遂ニ其株ニ逮フ、秤提無策ナルカ上ニ、苛政重刑ヲ以テス、估籍徒流卿井相望ムニ至ル、亦タ宜ナル哉、

第三 淮交

乾道元年戶部侍郎林安宅、會子廿萬ヲ淮南州ノ軍ニ給附

セノコトヲ乞フ、二年六月交子三百萬ヲ造リ、兩淮州縣ニ行使シ、交子見錢ヲ半用セシム然ルニ往來頗ル不便ナリ依リテ交會各二十萬ヲ、鎮江建康府ノ權貨務ニ交付シ、商旅ヲシテ、交換使用セシム、是ヨリ、先キ紹興ノ末、銅錢淮ニ禁セラレ、易ユルニ鐵錢ヲ以テス、今ニ至リテ會子ノ通融ヲ廢シテ、交子ニ易エント欲ス、淮民頗ル困苦セリ、右司諫陳良祐曰ク、須ラク交子ヲ罷メ、銅鐵ヲ兼行セシムヘシト、皇帝曰ク、武鋒一軍、彼處ニ在ルヲ奈セント、良祐尙ホ大ニ其不便ナルヲ陳ス、是ニ於テ兩淮ノ官吏ニ詔シテ、其利害ヲ申陳セシム、曰ク交子數多ク、銅會江ヲ過キス、是レ民旅ノ不便ヲ致タス所以ナリト、乃チ詔シテ銅會江ヲ過クルモ行使シ、且ツ交子ハ見錢ト爲シテ官ニ納ル、トテ許ス、後チ淮交ヲ用ウルモノ、之レヲ便トスルニ因リテ、嘉定十五年ニ至ルマデ復タ又タ三百萬ヲ增印セシム、於是乎、交子ノ數、日々ニ増シ、價月々ニ損ス、蓋シ秤提其術ヲ失スルニ、是レ由ルモノナリ、

第四 湖會

孝宗隆興元年、湖廣ノ餉臣王班、會子ノ江西、湖南ニ行ハレ

毀抹セルモノハ、新ニ抄造セシト乞フ、詔シテ之ニ從フ、是ニ於テ印造ノ專權ヲ其地ノ總所ニ委ス、是ヨリ印造ノ數日ニ増ス、而シテ會子止タ其地ニノミ行ハレタルニ、京南水陸ノ要衝ハ、流通便ナラストテ、總所ニ令シ、銅版ヲ印造シテ、尙書省ニ繳申セシム、又タ茶引、及ヒ會子ヲ發シ、禁毀セルモノヲ收換ス後チ朝廷再ヒ湖北會子二百餘萬貫ヲ印造シテ、舊會ヲ收兌セシム、

宋史ニ曰ク、寧宗之世會子壅滯、物價踴甚、民不勝其苦、朝廷無如之何、至是似道(賈似道ノ子ナリ)請稱提楮幣、改造金銀見錢關子、銀關行物價頓踴矣、ト抑モ當時ノ狀況ヲ原ヌルニ、實ニ言フニ忍ヒサルモノアルナリ、歲々月々紙幣ヲ保持セント欲スルモ、人民啻ニ之レニ信ヲ置カサルノミナラス、亦タ大ニ之ヲ畏怖スルヲ魑魅ノ如シ、而シテ糴本鹽本ヨリ、百官ノ俸給、軍士ノ支犒、州縣ノ支吾ニ至ルマテ、皆ナ悉ク紙幣ヲ以テセストイフコトナシ、銅錢ノ如キ見ルコト實ニ罕ニシテ、口ニスラ且ツ絶テ之ヲ言フモノナキニ至レリ、以テ貨幣ノ社會外ニ飛ヒ去リ、紙幣ノ其隙ニ乘シテ、慘毒ノ勢ヲ逞フスルニ至リシヲ見ルニ足ルヘキナ

リ、於是乎紙幣ノ價格大ニ損折シテ、物價ハ大ニ翔騰ス、軍卒常ニ飽カサルノ姿アリテ、動モスレハ政府ヲ嗟怨スルニ至ル、民ハ皆ナ憔悴枯槁シ、專室蓬廬ノ歸宿スヘキナク、沃野美田ハ變シテ、榛莽蒿藜ノ原トナル、老幼男女皆ナ飢ニ泣キ死者相ヒ枕席スルニ至ル、豈ニ膏ヲ筋骨餽餉ニ絶ユルノミナランヤ、社會盛衰ノ原理ニ着眼スルモノ、誰レカ之ヲ聞キ悵然トシテ憂ヘサルモノアラム「エール」大學理財學社會學教授博士サムナー氏ノ著書ノ中ニ、壞土利亞國紙幣ヲ論シタル一條ニ據ルニ一千八百十年、壞國政府レデムプシヨ、ノーツ」(編者曰ク兌換紙幣ト譯シテ可ナランカ未タ譯字ノ妥當ニシテ且ツ適切ナルモノヲ知ラス故ニ暫ク原語ヲ存ス)トイヘルモノヲ發行シテ、正紙幣原語「リーガル、フンダー、ノーツ」ニ代用シタリ、而シテ其交換ノ比例ハ一ト三トニ當ル、政府ノ之ヲ發スルヲ、其數實ニ限リナク、増發ニ又タ増發ヲナス、遂ニ民心疑惑シテ、更ラニ信ヲ之レニ措カサルニ至レリ、其流弊ノ波及スル所、實ニ深且大ニシテ、貧者ハ勿論、富家亦タ共ニ其禍ニ連ル、官吏傭員ノ俸給、甚タ少ナクシテ、日雇職夫ト其地位ヲ

ボチシヨ

同フスルニ至ル、農家耕耘ノ業ヲ以テ、僅ニ露命ヲ繫クト雖ヒ、奈セン貿易頓ニ衰微シ、蒼生艱難流離シ、憂國ノ志士ヲシテ、泣カシムルノ慘狀ヲ呈出スルニ至リシヲ、讀者宜シク米、壞兩國ノ異處同原ノ事件ヲ比較シ、楚毒ノ狀、孰レカ最モ太甚シキヤヲ判定スベシ、嗚呼古ヘハ錢ノ重キカ爲メニ紙幣アリ、今ヤ錢乏クシテ、紙幣常ニ病源タリ、何ソ相背馳セルノ甚シキヤ、加之ノミナラス、偽造日ニ滋ク、刑政日ニ苛ニシテ、錢幣ノ流弊ヲ匡救セントスルモ、到頭其目的ヲ達スルニ術ナキナリ、邦基紊亂民心潰叛シテ、遂ニ韃靼ノ醜虜ノ爲メニ堂々タル中華ノ國體ヲ殄滅サル、ニ至リシハ、紙幣ノ之レカ媒ヲ爲ス、實ニ多キニ居ルトイフモ決シテ過言ニ非サルナリ、

(未完)

批評

○彌爾ノ自由之理ヲ駁ス 文學士 井上哲次郎稿
 彌爾ノ自由之理ハ原語ニ「オン、リベルチー」ト云ヒテ、自由ノ權ヲ述べタル小冊子ナリ、我邦ニテハ、中村敬字翁ガ之

ヲ翻譯シ、自由之理ト題シテ世ニ公ニセラレテヨリ、其書盛ニ坊間ニ行ハルト云フ、余固ヨリ此ニ敬字翁ノ翻譯如何ヲ論ゼントスルニアラズ、但、彌爾ノ論ニ於テ決メ服従スベカラサル所アルヲ以テ、左ニ其概畧ヲ述べ、敢テ之ヲ大方ニ質サント欲スルノミ、然レモ自由之理ヲ以テ徹頭徹尾、非ナリトスルニアラズ、抑、自由之理ノ書タルヤ、扁々タル小冊子ト雖モ、行文ノ巧妙ナル、論法ノ精緻ナル、世間多ク其比ヲ見ス、然レモ亦間、謬誤ナシトセス、是ヲ以テ、スチーウ^チン氏已ニ之ヲ駁シ、以テ世人ヲシテ、其取捨スル所ヲ知ラシメタリ、然ルニ我邦ニテハ、方今西說ニ心酔スルノ弊アルヲ以テ、或ハ其謬誤ヲモ併テ信ゼンコトヲ恐ル、此レ余ガスチーウ^チン氏ト同シク自由之理ヲ駁スル所以ナリ、然レモ余ハ決メスチーウ^チン氏ノ從者トナラントスルニアラス、故ニ今余ガ自由之理ヲ駁スルニ當リテ毫モスチーウ^チン氏ノ說ヲ引用セサルヲ以テ、看官幸ニ之ヲ諒察セヨ、

第一、自由ノ定義ハ、姑ク之ヲ置キ、各自ニ由自ノ權アルト云フコトハ、何ニ據リテ之ヲ知ルカ、如何ナル理由アレハ、自

由ノ權カ各自ニ存スト云フコトヲ知リ得ルカ、猶ホ又言ヲ換ヘテ之ヲ言ヘハ、何故ニ不同ノ權カ當然ノ理ニアラサルカ、若シ實ニ自由ノ權カ各自ニ存スルナラハ、如何ナル確證アルヤ、若シ確證アルコトナラハ、世間ニ異說ナカルヘキニ反リテ異說ノ紛々タルハ、確證ナキノ確證ニアラスヤ、然レモ近代ノ學士ハ、大抵各自ニ自由ノ權アルト云フコトヲ假定シテ、何故ニ自由ノ權カ各自ニ存スト云フコトハ、純正哲學ニ讓リテ政治學ノ範圍中ニテハ、辨明セサルカ如シ、即チ彌爾ノ如キモ、亦其中ノ一人ニテ自由之理ニハ、始メヨリ自由ノ權カ各自ニ存スト云フコトヲ假定スルナリ、然レモ是レハ深ク尤ムルニ足ラス、何ントナレハ、自由ノ權ノ大本ヲ論スルニハ、必ス純正哲學ニ入ラサルヲ得ス、純正哲學ニ入レハ範圍ノ廣漠ナル、理義ノ高遠ナル、容易ニ收結シ難ケレハナリ、故ニ彌爾ハ始メヨリ各自ニ自由ノ權アルト云フコトヲ假定シテ、何故ニ自由ノ權カ各自ニ存スト云フコトハ、更ニ討究セサルナリ、

然ラハ彌爾ノ自由之理ヲ著ハスノ主意ハ何事ニアルヤ、請フ其書ニ就イテ之ヲ論セン、試ニ譯本ノ自由之理ヲ開

ケ、序論ニ「此書ハ人民ノ自由、即チ人倫交際上ノ自由ノ理ヲ論ズ、即チ仲間連中即チ政府ニテ各箇ノ人ノ上ニ施シ行フベキ權勢ハ如何ナルモノトイフ本性ヲ講明シ、並ビニソノ權勢ノ限界ヲ講明スルモノナリ」(譯本第一卷一葉)ト云ヒ、又「各個ノ人ノ權勢ト仲間連中ノ權勢トノ間ノ限界ハ如何様ニ定ムベキカト云フ」ハ、實際上ノ問題ニテ萬端、此一點ヨリ始マルナリ」(譯本ニハ此緊要ノ處ヲ脱スト云ヒ、又「予ガコノ論文ヲ作ル目的ハ、人民ノ會社即チ政府ニテ、一箇ノ人民ヲ取り扱ヒ、コレヲ支配スル道理ヲ説キ明ストナリ、即チ或ハ律法刑罰ヲ以テ、或ハ教化禮儀ヲ以テ、總體仲間ヨリ、銘々一人ニ施コシ行フベキソノ限界ヲ講ズル」トナリ」(譯本第一卷十六葉)ト云フ、コレニテ彌爾ノ自由ノ理ヲ著ハス所以ハ、社會ノ權理ト各自ノ權理トノ限界ヲ定ムルコトニアルヲ知ルベシ、委シク之ヲ言ヘバ、自由ノ權ガ各自ニ存スト云フハ、彌爾ノ討究スル所ニアラズシテ、各自ノ權理ガ何處マデ至ルカ、社會ノ權理ガ何處マデ至ルカト云フハ、彌爾ノ討究スル所ナリ、思フニ、獨リ彌爾ノミ然ルニアラズ、我邦ニテ能ク知ラレタル

リ―ベルウルシ―諸氏ノ如キモ亦皆然リ、然レモ彌爾ノ外ハ、姑ク之ヲ置キ、此ニ彌爾カ如何様ニ社會ト各自トノ間ノ限界ヲ立ツルカヲ見ンコ、序論ニ「人一己ノ行狀ニツイテ、他人ニ關係シ、ソノ損害トナルコトハ、政府ニテ、コレヲ可否スルコト、理ノ當然ナリ、」云云(譯本第一卷十八葉)トアリ、コレニテハ彌爾ノ説未ダ明瞭ナラズ、何ントナレバ、一己ノ行狀ガ他人ノ損害トナルキハ、政府ニテ之ヲ可否スルノ權アリトスルハ、可ナリ、然レモ實際上ニテ困難ナルコトハ、此事ニアラズシテ如何様ノ行狀ヲ認メテ他人ニ損害アリトスルカノ問題ニアリ、固ヨリ竊盜、強姦等ハ他人ニ損害アリトスベケレト、懶惰ナルハ何如、身ヲ不潔ニスルハ何如、鼻汁ヲ流ガシ、亂髮ヲ被リ偏肩ヲ高クスルハ何如、此ノ如クニ、推シ來ラバ、必ズ答フベカラズ、故ニ唯、他人ニ損害トナルコトハ政府ニ於テ之ヲ可否スルノ權アリト云フマデニテハ、決シテ社會ト各自トノ間ノ限界ヲ立ツト謂フベカラズ、然レトモ序言ノ處ハ總論ユヘ、猶ホ別ニ詳説アルナラント思ヒ猶ホ又全篇ヲ翫讀スルニ、第四章ニ社會ト各自トノ間ノ限界ヲ立テ、云ク「仲間會所

即チニテモ、箇々人民ニテモ、各最モ多ク自己ニ關係スル政府モノニ於テ、當然ノ分ヲ受クベシ、詳カニコレヲ言ヘバ、人生ノ事ニ於テ、人民箇々ノ邊ニ利益多クアルモノハ、人民箇々ノ占ムベキ分ニ屬ス、仲間會社ノ邊ニ利益多クアルモノハ、仲間會社ノ分ニ屬セリ「譯本第四卷一葉」ト、此ニハ最モ多ク即「チーフリー」ノ一語ヲ以テ限界ヲ立ツレド、是レニテハ限界ニナラズ、何ントナレバ彌爾ノ言フ所ノ如キハ、世人ノ知ラザル所ニアラズ、但實際上ニ於テ何如ナル行狀ガ最モ多ク各自ニ關係スルカ、何如ナル處置ガ最モ多ク政府ニ關係スルカ、分明ニ限界ヲ立ツル極メテ困難ナリ、然レモ分明ニ限界ヲ立テサレハ、弊害極マリナキヲ以テ彌爾乃チ之レガ限界ヲ立テントスルニアラズヤ、然ルニ最モ多クノ一語ヲ以テ限界ヲ立ツルキハ、彌爾カ解カント欲スル問題ハ猶ホ舊位ニアリテ、一步モ進マザルナリ、

然レモ彌爾ハ又別ニ限界ヲ立テ、云ク「若シ一人ノ行狀、一己ノミニ關係シ、他人ノ利益ニ差響カザルモノハ、凡ソコノ等ノ類、政府絶テコレト交渉セズ、コノ一人ニ十分

ノ自由ヲ與ヘヨ、但此人ハ十分生長ノ通常ノ智識ヲ有スル者トス「譯本ニハ此末段ヲ脱スト」ト云ヒ、又「年既ニ長大ナル人ニ向ツテ」云云「譯本第四卷四葉」ト云ヒ、又「年紀長大ニナルマデ、尋常ノ道理ニ合フ行狀ヲ知ラザラシメ」云云「譯本第四卷十六葉」ト云ヒ、又「政府即チ仲間會所ハ、人民ノ幼少ナルモノヲ教養スル」ト云ヒ、十分權ヲ有テリ「全上」ト云フ、然レバ彌爾ハ未ダ十分生長セサル人ハ、政府ニ於テ之ヲ障碍スルノ權アリトシ、年ノ長幼ヲ以テ、一ノ限界トスルニ似タリ、然レモ是レ亦泛濫不定ノ限界ト謂ハザルヲ得ズ、何ントナレバ五十七十八十九ノ齡マデ果シテ自由ノ權ヲ有スル能ハザルヤ、否ヤト云フコトヲ確知セザルベカラズ、然レモ各自ノ資質ハ固ヨリ相同シカラサルヲ以テ、丁年以上ニアラザレバ、自由ノ權ナシ杯ト分明ニ定メ難キニアラズヤ、尤モ法律上ニテハ、時宜ニ隨テ之ヲ一定スレモ、凡ソ法律上ニ一定スル所ハ、始メ理論上ニテ最モ至當ナリトスル所ニヨル者ナレバ、先ツ飽マテ眞理ノ存スル所ヲ討究セザルベカラズ、然ルニ今彌爾ハ十分生長セル人、即チ長大ナル人ノミニ自由ノ權ハ屬スト

ノ、限。界。ヲ。立。ツ。レ。ド。是。レ。ハ。頗。ル。曖。昧。ニ。シ、彌。爾。ノ。最。初。ノ。目。的。ト。合。當。セ。ザ。ル。ニ。似。タ。リ、彌。爾。又。別。ニ。社。會。ト。各。自。ト。ノ。間。ノ。限。界。ヲ。論。シ。テ。曰。ク「凡。ソ。事。ノ。明。カ。ニ。他。人。ヲ。損。害。シ、及。ヒ。公。衆。ヲ。損。害。ス。ル。モ。ノ。ハ、自。由。ノ。境。地。ヨ。リ。趕。出。サ。レ。テ、倫。常。或。ハ。律。法。ノ。境。地。ニ。轉。住。セ。シ。メ。ラ。ル。ト。ナ。リ」(第。四。卷。十。五。葉。ト。是。レ。亦。不。定。ノ。限。界。ニ。ア。ラ。ス。ヤ、何。ノ。ト。ナ。レ。バ、明。カ。ニ。他。人。若。ク。ハ。公。衆。ヲ。損。害。ス。レ。バ、固。ヨ。リ。自。由。ノ。權。ヲ。失。フ。ベ。ケ。レ。ド、實。際。ニ。於。テ。困。難。ナ。ル。ト。ハ、此。事。ニ。ア。ラ。ズ。シ。テ、損。害。ノ。決。シ。テ。明。ナ。ラ。ザ。ル。ト。ナ。リ。尤。モ。損。害。ノ。明。ナ。ル。者。モ。之。ア。ル。ベ。ケ。レ。ド、明。ナ。ラ。ザ。ル。者。モ。亦。之。ア。ル。ナ。リ、即。チ。明。ナ。ル。者。ト。明。ナ。ラ。サ。ル。者。ト。ノ。間。ノ。限。界。ハ。何。如。ニ。シ。テ。之。ヲ。知。ル。ヲ。得。ル。ヤ、

今又更ニ彌爾氏カ限。界。ト。ス。ル。所。ノ。科。條。ヲ。舉。ゲ。ン。コ

第一 最。モ。多。ク。關。係。ス。ル。ト。然。ラ。ル。ト、

第二 長。大。ナ。ル。ト。然。ラ。サ。ル。ト、

第三 他。人。ヲ。損。害。ス。ル。ト。然。ラ。サ。ル。ト、

以上ノ三科條ハ彌爾ガ社會ト各自トノ間ノ限。界。ト。ス。ル。所。ナルコト前ニ論辨シタルガ如シ、然ルニ能々之ヲ考察ス

レバ皆泛濫不定ノ者ニテ、井然タル一區分即チ限。界。ト。ハ、決。シ。テ。見。做。ス。ベ。カ。ラ。ス、故。ニ。余。ハ。彌。爾。ヲ。以。テ。其。最。初。ノ。目。的。ヲ。誤。マ。ル。者。ト。ス、即。チ。彌。爾。ガ。辨。析。セ。ン。ト。欲。ス。ル。所。ノ。問。題。ハ。彌。爾。ガ。勞。力。ニ。モ。拘。ハ。ラ。ズ、依。然。ト。シ。テ。其。ア。リ。シ。處。ニ。ア。ル。ナ。リ、
(未完)

雜 錄

○ダーウ井ン氏ノ傳

千 頭 清 臣

嗚呼ダーウ井ン氏ハ今ヤ則亡シ、顧レバ英國ハ、僅カニ一二年ニシテ、其最モ有名ナル學士四人ヲ喪ヘリ、即チ教法ニハスタンリーヲ喪ヒ、文學ニハカーライルヲ喪ヒ、政治ニハヂスレリーヲ喪ヒ、而シテ又理學ニハ、ダーウ井ンノ死ヲ告シルニ至レリ、ダーウ井ン氏ノ死ハ、何ゾ當ニ英國ノ之ヲ悲ムノミナランヤ、理學ノ尊重セラル、處トシ、之ヲ悲マサルハナシト想ハル、ナリ、蓋シダーウ井ン氏ハ理學世界ニテ泰斗ト仰カル、ト、既ニ五十餘年ナリキ、且ツ進化説ノ鼻祖ニシ、其他有用ノ書ヲ著ス、ト、數フルニ違アラズ、然ラバ今吾輩カ、其傳ヲ贊述スルモ亦無益ニアラサル

心シ、

ダーウヰン家ハ、世々才能アル人物ヲ出セル門派ナリ、吾輩今其三世以前ヨリノ人ノ事ヲ畧陳セン、

初世

ドクトル、イラスマス、ダーウヰン、此人ハ醫學士

並ニ學士會員ニテ、即チ今吾輩カ賛述セントスル、

ダーウヰン氏ノ祖父ナリ、此人英國ニテハ詩家、良醫、

且ツ生理學者トシテ、世上一般ニ知ラレ、又一「ボタニツ

クガーデン」テンプル、ヲフ、チチーロー、社會淵源論

等ノ諸書ヲ著ハセリ、

ロバート、ワリング、ダーウヰン 此人ハ植物原論

ノ著者ナリ、

二世

チャーレス、ダーウヰン 此人ハ廿一歳ニテ夭死

スト雖也、其才器ハ既ニ已ニ世上ニ知ラレタリ、其醫

學論文ノ賞トシテ、イデンバラ大學校ヨリ、金ノ賞牌

ヲ得シコアリ、

ロバート、ワリング、ダーウヰン 此人ハ醫學士並

ニ學士會員ニテ、醫ヲ業トス、即チ吾輩カ今云フ所ノ

ダーウヰン氏ノ父ナリ、

サー、フランシス、ダーウヰン 此人モ醫學士ナリ

性甚タ蛇ヲ好ミ、又好ンテ山林ヲ徘徊セリ、

三世

チャーレス、ダーウヰン 此人醫學士並ニ學士會員

ニシテ、即チ吾輩カ、今其傳ヲ記スル所ノ人ナリ、

フランシス、ガルトン 此人ハダーウヰン氏ノ從弟

ナリ、學士會員並ニ地學會員ニテ、理學ニ關シ、多ク好

書ヲ著ハセリ、

四世

デューズ、ダーウヰン 此人ハケムブリッヂ大學校、第

二番ノ卒業生ナリ、

カピテンレヲナード、ダーウヰン 此人ハ海軍後

備隊指揮長官ナリ、

ヘンリー、パーカー 此人ハ古學者、且ツ化學者ナ

リ、

以上

ダーウ井ノ家ノ人才ヲ出ス、大抵此ノ如シ、

吾輩是ヨリダーウ井ノ氏ノ本傳ニ入ラン、氏ハ幼時ヨリ
 嶄然トノ頭角ヲ見ハシ、猶ホ廿一歳未滿ノ時、其教師ノ一
 人ナル、プロフェッソルヘンスロー氏(ケムブリッヂ大學校
 ニテ、植物學ヲ教授セシ人ナリ)、大ニ氏ノ才能ヲ贊稱シ、
 氏ヲカピテン、フ井ツロイ、並海軍將校ニ推薦シタリ、是ニ
 於テ氏亦欣然ト之ヲ喜ヒ、其給俸ヲ受ケスノ、ビーグル艦
 ノ遠航測量ニ從事セリ、時ニビーグル艦ハ、南米大陸並ニ
 南海ノ吟味ヲナサントセリ、氏乃チビーグル艦ニ割シ、一
 千八百三十一年、英國ヲ出航シ、艦中ニ在ルヲ凡ソ五年ニ
 ノ、一千八百三十六年ニ至リテ歸國セリ、此時地球ヲ一周
 シテ、理學ヲ精究セリ、歸國ノ後幾モナク、一書ヲ發兌シ
 テ、航海中ノ異事奇聞ヲ洩シ、且ツ其自ラ觀察セシ所ヲ載
 セ又ビーグル艦ノ採知セシ、動物學ノ一書ヲ編纂セリ、爾
 後氏ハ死ニ至ル迄、其一生ヲ天地萬物ト、其法則ヲ講究ス
 ルニ委シタリ、其暇ニハ尙斷ヘス、諸雜誌ニ投書シ、且ツ
 諸書ヲ著ハセリ、其二三八、前號ノ雜誌ニ記載セルカ如シ、
 却說ビーグル艦ノ航海ハ、氏カ一身ニ付テノ一大事ニシ

テ、是ヨリ遂ニ全世界ノ一大事トハナレリ、如何トナレハ
 氏カ進化説ニ始メテ傾意セシハ、此航海中ノコニテ、其如
 何シテ起リシヤハ、日耳曼ノプロフェッソル、ヘツケル氏
 へ贈リシ書翰中ノ一章、並其一大著書ノ自序中ニ説ク所
 ニテ、其大畧ヲ了スルヲ得ヘシ、其言ニ曰ク、余ハ博物學
 者トシ、ビーグル艦ニアルキ、南米大陸ニアル有機物ノ處
 々ニ、散布シ並ニ其無形有形ノ情形カ此土ニ住スル、古今
 ノ生類ニ干係アルノ事實ヲ見、偶々感ヲ起シ以爲ク此事實
 ニ由テ、深ク考究セハ、我一大學者カ、不可思議中ノ不可思
 議ト呼ビシ、種屬ノ起元、大ニ分明ナラント、氏ハ乃チ此感
 ヲ以テ、許多ノ事實ヲ講究シ、竟ニ多クノ道理ヲ講明セリ、
 尙ホ其言ヲ引カンニ曰ク、余カ歸國後、一千八百卅七年ニ
 偶々心ニ浮ヒタルハ、此念ヲ本トシ、是ニ少シナリトモ干係
 アル事實ハ、總テ之ヲ類集シ、之ヲ反省センニハ、何カ一ノ
 結果アルヘシト、斯テ廿三年間、能ク其觀察反省ヲ遂ケ、始
 メテ種屬起元論ヲ一千八百五十九年ニ發刊セリ、此書ノ
 一出スルヤ、大ニ理學ノ面目ヲ新ニシタリ、生物學ノ如キ、
 即チ其最タル者ナリ、氏ハ此書ニ於テ、許多ノ證據ヲ本ト

シ、凡ソ何レノ種属ナリト、必ス他ノ種属ヨリ出シモノナ
 ルヲ斷言セリ、此說タル當今ノ理學ノ大家モ、多クハ信憑
 シテ疑フベカラストスル所ナリ、然ルニ一方ニ在リテハ、
 此說ホド世人ノ喧噪ヲ來タセシモノハアラサルヘシ、或
 ハ雜誌ヲ發行シ、或ハ書ヲ著ハシテ、之ヲ保護スルモノア
 リ、或ハ之ヲ攻撃スルモノアリテ、其紛亂實ニ名狀スヘカ
 ラス、尙今ニ至ルマテ、言論ノ戰爭ハ止マサルナリ、
 我讀者ハ、何故ニ此說ノ此ノ如クナリシヲ解スルヤ否ヤ、
 若讀者ヲシテ、善ク此說ノ要領ヲ會得セシメハ、更ニ深ク
 且ツ廣ク、其說ヲ講明シテ其干係ヲ記セラルナルヘシ、
 然レトモ此事タル、容易ニ爲シ得ヘキニアラサレハ、今簡單
 ニ陳ノコ、唯氏ノ說ハ、直ニ聖經ノ教ニ反スル者ナリト云
 ハ、固ヨリ其原因ヲ盡ス言ニハ非サレトモ、讀者ハ思ヒ半
 ニ過キン、元來聖經ノ言ニハ、凡百ノ種属ハ、一ニ天帝ノカ
 ニヨリ、各殊ニ創造サレシモノナリト然ルニ氏ハ之ニ反
 シ、何レノ有機物ナリト、些少ノ差等ニテ、他属ト關係アル
 モノニテ、古今ヲ問ハス、動植ヲ別タス、有機物ノ諸体ハ、其
 初メ一種カ或ハ多クトモ四五種ノ祖先ヨリ出テシモノナ

リト、又聖經ノ言ニ、天地萬物皆ナ上帝ノ意アツテ之ヲ六
 日間ニ創造セシモノニテ、猶ホ工匠カ椅子、卓子ヲ造ルカ
 コトシト、然ルニ氏ハ之ニ反シ萬物皆ナ無數ノ時日ヲ閱
 シテ、自ラ逐次ニ進化セシモノナリト、
 (以下次號)

○ダールウイン氏ノ訃ヲ得テ懷ヲ述フ 箕作佳吉

凡ソ喜怒哀樂等ノ事ニ就テハ、東洋ノ文ハ心地悪キ程ニ
 虚飾夸張シ、一寸ノ事モ、一丈トナシ、一年ノ事モ、萬歲トナ
 スノ風習ニテ、反テ其質ヲ失ヒ、面白カラス覺ユ、然ルニ世
 ニ名望アル人ノ死セル時ナトニハ、知ルト不知ト、皆之ヲ
 惜ムト云ヘル語アリ、此一語ノ如キハ大ニ其情ニ當レリ
 ト云フヘシ、一昨年ノナリキ、英國ノ有名ナル作者ジオ
 | ジ、エリオット (此ハ匿名ニシ、實ハ一學
 者ル—イス氏ノ妻ナリ) ノ訃音達シタ
 タル時、余ハ固ヨリ其人ヲ知ラサレトモ、恰モ一友ヲ失ヒタ
 ル如キノ感ヲ覺ヘタリ、然レトモ、此ノ識ラサリシト云フハ
 唯對面談話セシヲ無キヲ云フマテニテ、常ニ其書ヲ讀テ
 之ヲ愛シ、其心ノ清廉ニシテ、且ツ高尚ナルニ感シ、其思想
 ノ如何ナルヲ知ルニ至リテハ、恰モ親友ヲ愛シ、其才ニ服
 シ、其心ヲ知ルニ等シケレハ、其死報ヲ得テ、哀痛セシハ固

リ當然ナリ、今茲ダルウイン氏ノ死ヲ聞クヤ、余ハ復一ノ師友ヲ喪ヒタルノ感ヲ爲セリ、今其理由亦自ラ明白ナルヘシ、抑モダルウイン氏ハ、今世ノ生物學ノ先知先覺ニシテ、固リ師ト稱ス可キモノニシテ、二十年來生物學ノ大ニ進歩セシハ、全ク同氏ノ説起リシニ因ルト云フモ可ナリ世人多ク以爲ク、ダルウイン氏ノ説トハ、猿猴ノ變シテ人類トナリタルヲ主張セルモノナリト、妄誤モ亦甚タシト云フ可シ、（ダルウイン氏ノ説義）ト稱スルモノハ、決シテ此ノ如キモノニ非ス、今其大畧ヲ述レハ、現今世界ニアル動植物ハ、其種類ノ多キ、數フ可ラサルホドナリト雖モ、其始ヲ尋テ、其源ニ遡レハ、僅ニ一種、或ハ多クシテ數種ヨリシテ、自然淘汰ノ理ニ從ヒ、次第ニ變化シ、類ヲ生シ、種ヲ増シ、遂ニ今日ノ有様ニ至リタルナリ（エボリユージョン）進化ノ説ヲ唱ヘシハ、ダルウイン氏ニ始ラス、現ニ佛人ラマルクノ如キハ、其所著ノフヒロソヒーヅヲロジックト題セル書中ニ、明白ニ其説ヲ述タリ、余ハ思ヘラク、生物學ヲ學フモノハ、少ク勘考セハ、活物ノ種類ハ進化ニ因リテ増加セシメノ疑ヲ起サ、ルヲ得スト、然レモ活物ノ如何シテ進化セ

シヤ、（プロセツス）其理由ヲ説明スルハ、凡庸ノ爲シ得可キニ非ス、現ニダルウイン氏ニ先チテ、進化ノ説ヲ唱ヘシ者アリシモ、其説ノ世ニ行レサリシハ、其ノ理由ヲ解明セサリシ故ナラシ、（オオ）ダルウイン氏ニ至リテ、始テ自然淘汰ノ理ヲ發見シ、其理由ヲ述タルヲ以テ、遂ニ世人ノ信ヲ得テ、進化ノ説廣ク行ハル、ニ至レリ、今ダルウイン氏ノ説行ハレテ、生物學上ニ如何ナル影響ヲ起セシヤト云フニ、往日ノ博物學ヲ以テ、今日ノ生物學トナシタルハ、全ク其功ナリ、僅ニ數年前迄ハ、人皆動植物ノ種類ハ、恰モ人形師ノ人形ヲ作ルカ如ク、造物者ノ一々手ヲ下メ、創造シタルモノナリト信シタリ、故ニ動植物ノ組立、其用ニ適應シ、人ヲノ感セシムルモノアルモ、造物者ノ此ノ如ク造リシハ、唯妙ナリト稱セシマテニテ、更ニ其理ヲ究ントスルモノナカリキ、蟻ノ甘物ヲ發見スル、鳥ノ夏ハ北ニ往キ、冬ハ南ニ來ル、蜂ノ巢ヲ造ル等ノ如キ、事實ハ人皆其奇妙ナルヲ感スルモ、唯天ノ此ノ如キ性ヲ與ヘタルナリトシ、之ヲ捨置キ更ニ其理ヲ知ラントスルモノナカリキ、此ノ如キ際ニダルウイン氏ノ説出テ、今ノ世

ニ現在セル、千萬種類ノ動植物ハ、前世界ニ在リシ物變シ、進ンテ今ノ形狀ニ及ヒ、其原ヲ尋ヌレハ此ノ世界ニ初メテ活物ノ生セシキハ、僅カニ一種、或ハ數種ニ過キサルナリ、此驚ク可キ進化ハ、自然淘汰ノ理ニ因リテ、起リシモノナリト説明セリ、固リ此ノ如キ新奇說ハ、俄ニ人ノ信ヲ得サルモノナリト雖モ、二十年來生物學者ノ勉勵著シク、其證據日ニ月ニ明確ニナリ、今日ニ至ツテハ生物學者ノ中、ダルウイン氏ノ說ニ從ハサルモノ殆ト無キニ至レリ、往日ノ博物學ハ、唯生物ニ就キ、其形狀名稱等ヲ舉タルノミ其ノ事實ノ原因ニ至ツテハ、之ヲ舍テ更ニ問サリシカ、今日ノ生物學ハ、何ニ限ラス、一事アレハ必ス、其理ヲ尋テ、其ノ因テ起リシ所以ヲ究ム、實ニ一大變革ニ非スヤ、ダルウイン氏ノ生物學ニ於ケル、恰モニユートン氏ノ天文學ニ於ルカ如シ、又此ノ世界ニ於テ、一學科上ニ、此ノ如キ變革アレハ、他ノ一切ノ事物、此ニ感應スルハ理ノ當然ナリ、ダルウインニズムノ大ニ世事ヲ變動セシハ、人ノ能ク知ル所ニテ、後世ノ人、千八百年代ヲ回顧シ、其ノ最モ大切ナル變化ハ、此ノ進化ノ說ノ初メテ明白ニナリタルナリト曰フ、

ダルウイン氏ハ、實ニ當紀屈指ノ一英傑ナリ、我輩此ノ如キ人ト同時ニ生レ、其說ノ廣ク行ハレシヲ見ルハ、豈悅ハシカラスヤ、聞クダルウイン氏ハ其ノ爲人柔和ニシテ、其名聲天下ニ轟クト云ヘト、更ニ自得ノ色ナク、子トナリ、夫トナリ、父トナリ、友トナリ、皆能ク其義務ヲ盡シ、親ク其人ニ接セシモノハ、皆之ヲ信愛セサルナシ、ダルウインノ說ハ、西洋聖書ノ第一章ニアル、天地創造說ニ反スルヲ以テ、其ノ教ヲ奉スル徒ニシテ、無學ナルモノハ、ダルウインヲ詆訾シ、彼黨中ニハダルウインヲ指シテ、無類ノ惡心者ナリト云フニ至レリ、是レ恰モ往昔コーペルニカス、ガリレオヲ駁撃シ、近日ニ在リテ、地質學ヲ惡ミシト、皆同一徹ノヲナリ、ダルウイン氏ハ、此輩小人ノ己ヲ非毀スルヲ更ニ意トセス、唯一心ニ造化ヲ探究シ、其ノ真理ヲ知ルヲ以テ任トセリ、其著述ヲ見ルニ、一點執拗ノ意ナク、其心極メテ公平ニシテ、始ヨリ終ニ至ルマテ、一トシテ曲ゲテ、己ノ說ヲ主張セントスルナシ、已ニ抗スル人ノ說ヲ見ル、恰モ自己ノ說ノ如ク一ノ事實ニテモ、彼ノ助ケトナルモノアレハ、必ス之

ヲ採リ、敢テ自ラ勝ヲ取ルヲ欲セス、唯眞理ヲ知ラントヲ望メリ、實ニ理學者ノ師表トシテ仰慕ス可キ人ナラスヤ、余ハ同氏ト一面ノ識ナシト雖モ、今其訃ヲ聞キ、痛惜ノ餘リ、聊思フ所ヲ述フ、我同學者モ亦必ス、余ト其感ヲ全クスル者アラソ、

○西洋諸邦ハ勿論、凡ソ地球上ノ人民、其平常用フル所ノ言語ヲ以テ、詩歌ヲ作ルヤ、皆心ニ感スル所ヲ、直ニ表ハスニアラサルナシ、我日本ニ於テハ、往古ハ此ノ如クナリシト雖モ、方今ノ學者ハ、詩ヲ賦スレハ、漢語ヲ用ヒ歌ヲ作レハ、古語ヲ援ケ、平常ノ言語ハ、鄙ト爲シ、俗ト稱シテ、之ヲ採ラズ、是豈謬見ト爲サズルヲ得ンヤ

夫レ我邦人ノ漢學ヲ修ムルヤ、殆ド皆ナ所謂變則ナルモノニ由リ、漢土ノ本音ヲ以テ、其文ヲ讀下スルモノ甚少ナシ、然シテ韻書作例等ニ因テ、平仄韻字ヲ學知スルモ、之ヲ用ヒテ詩ヲ作ルニ當テハ、既ニ本音ヲ發スルニ非ザレバ、到底室内ニ游泳ヲ試ムルカ如クニシテ、隔靴ノ憾ナキ能ハス、何トナレバ、凡ソ詩歌ハ、意義ノ優雅、奇巧ナルハ素ヨリ、望ムヘキ所ナレトモ、音調ノ宜シキヲ得

ルヲ、亦極メテ肝要ナレバナリ、而シテ音調ナルモノハ自國ノ語、又ハ他國ノ語ナレバ、其音聲ニ曉熟スルニ非ザレバ、其眞趣ヲ翫味スル能ハサルヤ明ケシ、試ミニ變則流ノ洋學書生カ、辭書ニ依リ、作例ニ從テ、音聲ノ強弱ヲ學ビ、詩ヲ賦ストセヨ、誰カ其迂ヲ笑ハザラン、又古言、雅言ヲ以テ、長歌、短歌ヲ作り並ブルモ、吾人常ニ用ヒザル所ナレバ、稍外國語ニ類スルカ故ニ、之ヲ以テ精密ニ我哀情ヲ攄ヘ我思想ヲ揅ス^ツコト或ハ難カラソ、果シテ然ラバ余以爲ク、宜ク平常ノ語ヲ少シク折衷シ、以テ稍新體ノ詩歌ヲ作り、充分ニ吾人ノ心ニ感スル所ヲ、吐露スベキナリ、然レモ之ヲ言フモ爲サズレバ、人或ハ目シテ妄誕漫言ノ徒ト爲サソ、故ニ余謫劣ヲ顧ズ、頃者試ニ西洋ノ詩數首ヲ譯シ、既ニ其一ニ新聞雜誌ニ載セシコトアリ、今復此新紙ノ餘白ヲ借テ、拙作二首ヲ掲ゲ、江湖諸彦ノ一粲ニ供ス、其一ハ自作ニ係リ、但シ始ノ一節ハ、大佛財法日課勸進之序ヲ取捨シテ作レルナリ、其一ハ西詩ノ譯ニ係ル、余素ヨリ文事ニ疎ク、詞藻ニ精シカラズ、江湖諸彦ノ、幸ニ我微意ヲ諒察アラソヲ乞フ、

尙今居士

鎌倉の大佛に詣で、感あり

今とさることろさふれば

建長のころ鎌倉に

總青銅の大佛（からがね）の

相好いと、圓滿し

何れの地にも比類なし

由井のつちみの難により

紫磨金（しまごん）仙も雨に濡れ

殆ど此に四百年

余もこのころ鎌倉の

杖と引きつゝ大佛に

しうと尊顔見上れば

淨き如來の御心の

涅槃てふ語の思ひれて

しべしの間胸の雲

眞如の月の圓りある

見たるが如き心地せり

夫れ物事のありたちの

昔し羅馬の帝國の

起りしものにあらざりし

六百年の其むりし

稻多野（いたの）の局建られし

御身のたけも五丈にて

見者無厭の尊容の

さるに明應四年とや

大殿破壊（はぶ）の其後の

風に暴されたまふこと

こはこれ人に聞くところ

古跡尋ねてとちこちと

詣で、心おちつけて

はちその花もおよひあき

外に見られ何となく

凡夫不覺の余とても

霽れて無明の夢の醒め

影と見たるにあらねども

頼（たの）にとゝのふことぞあき

シーザルひとり知と奮ひ

徳川氏の繁昌の

家康ひとり徳ありて

時勢人情やうやくに

鎌倉山の大佛も

千百年と過ぎし後

鑄もの、術も具はりて

稻多野夫人の時代に

精神こめて手と合せ

わが後生と祈れども

生れし人の然はせむ

昔の事と思ひやり

業（わざ）とはむるの外をなし

秋の空にも劣るまじ

昔の人の是とあし、

今日の眞（まこと）のあその偽（うそ）

非理邪道とやあるからん

規律に由りて進化すと

睨と心に認めたる

嗚呼盛ある大佛よ

うらくれあるのもみぢ葉と

人の譽むるに異からむ

如何に時勢の變るとも

歎賞せざることをけん

成りしものとあ思ひそよ

運びて此に至りてき

浮屠氏の教へ渡り來て

人の信仰厚くあり

初めてありしものからん

此大佛に打向ひ

天下太平安穩と

今の明治の聖代に

佛の面（おもて）と打眺め

其鑄工（いものし）の巧みある

うはれべうなる時勢うあ

事も今での非とぞある

あその教のあさつての

天地萬物一定の

學者の謂へど是と之れ

人の果してありららん

六百年もたつと川

流るゝ水と年々に

尊體（とんたい）此處（こゝ）に在まらば

年々人の尋ね來て

（一首ハ次號ニ譲ル）

○西詩和譯

坪井正五郎

いさの出入りとからごの血　まかのみからまよき心地
 清きましましひこれ命　時計のめぐりはやくふち
 遽に變る針の位置　歳はまぐともわざとさち
 かきひ則ち無能無智　多く考へ氣とふもち
 よきはふらきと爲せる後　長しと言はんこのいのち

井上巽軒曰。押韻自在。可喜。又曰。學者日誦之以自勗。則其進步可期而矣也。

寄書

讀原道評

杉浦正臣

偶閱東洋學藝雜誌。其第七號載井上學士讀原道文一篇。頗有足使陋儒落膽者焉。惜夫。其所見未精到。而未足以病韓氏也。抑予亦於韓氏之說。非無異見也。而又有與學士之說不相容者。所以作此評。非敢專黨於韓氏而然也。讀者諒焉。

學士曰。仁有君子小人。而義有凶有吉。其然豈其然乎。抑仁義或有似而非者。似而非者非仁義也。故其人仁義邪。則君

子耳。不仁不義耶。則小人耳。苟不仁不義。豈得謂小人之仁義之凶者乎。所以仁義之爲定名也。道者猶言行路。行路可以南也。可以北也。德者猶言人品。人品有正焉。有邪焉。南云北云。何往非道。正云邪云。何行非德。所以道德之爲虛位也。豈可紊亂乎。學士又曰。韓氏不知有大於仁義者。故大仁義也。蓋老子之時。風俗陵夷。人皆以煦々爲仁。以子子爲義。老子觀其如此。以爲仁義之用盡於此矣。故直非毀之。而未知仁義之有大作用也。謂之坐井而觀天。不亦宜乎。學士又曰。至信已排他之心。則何以異也。夫人不能自信則已。苟有所自信。則焉得不排其所不信哉。韓氏欲明仁義之作用。以矯道學之流弊也。而孔子與老子。同說道德。而其所道。則有水炭相反者焉。加之。末學支離。彼此抵牾。頗有使衆目眩惑者焉。故用刀斷亂絲法。以辨折其異同也。且夫莊子之學宗老子。而其言曰。屬其性乎仁義者。雖通如曾史。非吾所謂臧也。吾所謂臧者。非仁義之謂也。臧於其德而已矣。由是觀之。道家之徒。亦信已排他也。何獨於韓氏尤之。學士又曰。老子之所謂道德者。非去仁與義言之也。然老子不言乎。大道廢有仁義。是非去仁義而何。且其所謂慈。與孔子所謂仁。

甚有逕庭也。何者。孔子所謂仁者。愛及天下之名。而韓氏所謂博愛是也。老子所謂慈者。不害物之意。而與佛氏所謂慈悲者。無以異也。韓氏目以煦々。不可謂不當也。學士又曰。公言私言。以其所親聞見。謂之公言也。不然謂之私言也。又曰。韓氏唯據一國之公言。斷然決事之是非正邪。夫家國之隆盛。人之所同欲。而仁義使家國隆盛之道也。人之所同欲。即公也。非私也。故以仁義為公言也。而老子之徒。則欲行太古無為之事。是生乎今之世。反古之道者。而非人情也。非人情者。非公言也。韓氏排之為私言。不亦宜乎。學士又舉索刺氏之排神異。私密氏之以金換物。閻龍氏之說地球之事。而云。韓氏將曰三氏言私言也。故不足信耶。是何言也。三氏之言。莫一非開物利世之事焉。即亦仁義之實也。以予視之。若三氏者。與漢人所謂聖者。其所為雖殊。其所以為仁義則一也。假使韓氏與聞三氏之言。則必稱曰仁義之士矣。必評曰天下之公言矣。學士又曰。真理之始出也。必私言也。夫真理之所以為真理者。非以裨世益人乎。裨世益人。即是仁義之實。而公言之效也。可謂之私言耶。學士又曰。以常害非常。執若以常不害非常。凡言有常而公者焉。有非常而私

者焉。有非常而公者焉。有非常而私者焉。故不可以常與否判公私也。苟其言之不公。常與非常。皆足以害世矣。焉得不擯斥乎。學士又曰。孔老二氏之學。其旨意往々相符合焉。而引二氏之言証之。且引佛氏所謂始成世善之說。以為與孔子之道不異。其說頗有似林子之說者。而予未以為然也。抑欲知孔老之所異。則須先就其所行而觀之。則其旨意有大不相同者焉。何也。孔子與老子。皆生於衰周之世。而孔子則憂世傷時。其志在濟世澤民。而老子則離世絕俗。其意欲善身潔行。則知孔子主有。而老子主無。孔子不屑去。而老子不屑就也。豈得謂其學之旨意符合乎。且夫孔子仁恕之德。與佛氏濟衆之心。其旨意非無相似者。而其道則不啻天淵。所以不免有毫釐千里之差也。韓氏之辨。豈得已乎。學士又曰。韓氏惡人進于文明。趨于開化耶。惡是何言也。所謂文明開化。豈恠之謂耶。韓氏所謂恠者。蓋概言木食穴居之行。天堂地獄之說也。假設以木食穴居之行。天堂地獄之說。為文明開化耶。則予之非所知也。若其不然。則韓氏之所說。即皆經世濟民之事。而所謂文明開化之道也。豈可謂惡開明乎。學士又曰。孟子醇乎醇者也。荀與揚大醇而小疵。予閱至此。不

覺噴飯也。何也。其孟荀揚之醇疵如何則姑置焉。抑學士之所讀。非原道耶。而今乃突如舉韓氏讀荀子之文來。嗚々辨駁去。是何等之文法也。學士博覽非不通曉韓文之人。而謬誤至於斯者。蓋因原道末段有荀與揚也。擇而不精。語而不詳之語。偶然失之耳。復何傷乎。然或不保無使讀者疑其餘亦皆有謬誤也。予爲學士深惜之。」學士又曰。獨仁于廢疾者。不仁于生產者也。韓氏所謂養鰥寡孤獨者。即周文治岐之政。而特以恤此四者。爲庶政之先者。是周急之意。而所以明施政之序也。非曰仁者之道盡於此也。故曰其亦庶乎其可也。且夫古之爲民者四。今之爲民者六。士農工賈爲四。加老佛爲六。而黃冠緇衣之徒。或外人道。而食人食。則不免爲遊手徒食之民也。由是觀之。學士所謂耗產而不爲益者。不在於彼而在於此也。故天下無此輩。則移其資用。以制窮民之產。而後仁政可施也。豈可謂之不仁乎。」要之。其文章可觀。理論可聽。無補于世。則其文其理。不若糞土也。何足稱哉。若韓氏原道。雖非全無瑕疵。然要亦菽粟布帛之文。而有裨于世者。豈可謂不足取乎。抑學士亦憂世之士。其意專在於矯末學之弊也。故其駁韓氏。或不免矯枉過直耶非耶。姑叙所見。以作之評云。

○書ハ美術ナラス (前號ノ續) 小山正太郎

世上ニ於テ徒ニ美術ナリト稱スル言ノ、信スルニ足ラサルハ、已ニ之ヲ陳セリ、是ヨリ進テ書ト稱スル者ノ中ニ、美術ト爲スヘキ部分アリヤ否ヲ搜索スヘシ、之ヲ搜索スルニ二アリ、即チ第一ハ書トハ、如何ナル術ナルカヲ探究スルヲ、第二ハ之カ如何ナル作用アルカヲ探究スルヲトス、因テ先ツ其第一ヲ探究スヘシ、抑、書トハ、前已ニ述フル如ク、言語ノ符號ヲ記スルノ術ナリ、故ニ其術タルヤ、圖畫ノ如ク、彩色ヲ設クルニ非ス、濃淡ヲ着クルニ非ス、又彫刻ノシテ、人目ヲ娛ムル様ニ、工夫ヲ凝スノ術ニ非ルナリ、獨リ彩色ヲ使用スルノ巧拙無キノミナラス、其形モ亦圖畫、彫刻等ノ如ク、各人各自ノ才力ニ由テ、作り出ス者ニ非ス、抑、文字ノ形ハ、往古倉頡ノ創テ作りシヨリ、史籀大篆ヲ作り、李斯小篆ヲ作り、王次仲八分ヲ作り、程邈隸書ヲ作り、史游章草ヲ作り、劉德昇行書ヲ作り、蔡邕飛白ヲ作り、張白英草書ヲ作ルノ外、支那ト雖モ、復タ變換スルヲ無シ、況ンヤ我國ニ於テヤ、(此他尙ホ二三ノ増損スル者アレモ、大同小異、大別スレバ、此八種ニ過キス、)

爾來數十百年、因襲使用一日ノ如シ、大才アリト雖也、亦今日新タニ、其形ヲ改作スルヲ得ス、例へハ如何ニ能書タリ也、十字ヲ作ラント欲セハ、横ニ一線、縦ニ一線引カサルヲ得ス、故ニ書ハ圖畫彫刻等ノ如ク、人心ヲ娛メント、百方工夫ヲ凝シ、各人各自、才力ヲ用ヒテ、其形ヲ製出スル術ニ非ルナリ、獨リ形ト色トヲ作り出スヲ要セサルノミナラス、之ヲ配列スルノ力モ亦要セサルナリ、凡ソ書ナル者ハ、必ス先ツ文句定リ、然ル後之ヲ記載ス、故ニ先ツ何々ノ下ニ、何々ヲ配シ、何字ノ上ニ、何字ヲ置クト云フコトハ、詩若クハ文章ノ力ニ由テ撰定セラレ、然後其通りニ記スルニ過キス、如何ナル能書ト雖也、書ノ力ヲ以テハ、之ヲ變換スルヲ得ス、例へハ詩人カ、猛虎一聲山月高ト云フ一句ヲ作ルノ後ハ、書家此句ヲ書スルニ當テ、恣ニ文字ノ配列ヲ變換スルヲ得ス、必スヤ一聲ハ猛虎ノ下ニ、山月高ハ、又其下ニ書セサルヲ得ス、故ニ圖畫、彫刻等ノ如ク、諸物ノ位置、照映ヲ考へ、人心ヲ娛メント心思ヲ碎テ、配列スルノ術ニ非ルナリ、由此觀之ハ、書ハ凹凸ヲ作ルノ術ニ非ス、濃淡ヲ分ツノ術ニ非ス、彩色ヲ施スノ術ニ非ス、配列ヲ工夫スルノ術ニ

非ス、形象ヲ製出スルノ術ニ非ス、然則其術タル知ルヘキノミ、他人已定ノ配列ニ由リ、古來一定ノ形ニ順ヒ、彩色、濃淡等ヲ施用セス、唯一色ヲ塗抹スルノ術ナリ、故ニ一色ヲ已定ノ形ニ塗ルトノ一言、以テ書ノ定義ヲ盡スニ足ル、要スルニ圖畫、彫刻等ノ如ク人ノ心目ヲ娛メント、工夫ヲ凝ラシテ、一種ノ物ヲ製出スルノ術ニ非ルナリ、故ニ其巧拙モ亦、筆端些小ノ趣味ニアルノミ、而シテ此一色ヲ已定ノ形ニ塗り、筆端些小ノ趣味ヲ有スルノ術ハ、獨リ書ノミニ非ス、泥工ノ壁ヲ塗り、提燈匠ノ紋形ヲ畫ク等、枚擧ニ暇アラス、且蟹行文モ亦、一色ヲ已定ノ形ニ塗り、筆端趣味ヲ有スルノ術ナリ、而シテ此等諸術ノ美術ナラサルハ、已ニ明カニシテ、諸君ノ共ニ許ス所ナリ、然ハ則書ノ美術ナラサルモ亦明カナラスヤ、

(未完)

雜 錄

○去月廿日東京大學三學部に於て開會せられし、東京生物學會に出席せられし、通常會員十六名、名譽會員一名にして、幹事前會の記事を朗讀せられし後、石川千代松氏

小笠原島産、オシボタ(海蟹の一屬)の眼莖變狀論と述べら

れ、次に佐々木忠二郎氏、鯢魚の卵子發育の説と演舌せら

れ、其外箕作佳吉氏の、ダルウヰン氏新著の蚯蚓研究書と

講し、石川千代松氏の、^{タナゴ}鱧魚(Ditremae Taminokii, Bleeker)

の胎生魚あるの説と述へられ、午後四時散會せられり、

○昨年の數彗星の現出せし年にて、殊に南半球に於て多

く觀測せしが、既に日本にても兩度まで、觀測せし程あり

しに、本年の唯一箇の彗星と四月六日、羅馬大學校天象臺、

三月十九日、亞米利加合衆國ハルワルド大學校、三月廿八

日、ウヰヤナ等の諸所にて、觀測せしといふ、

○左の一編の栗田萬次郎君より寄送せられしものにして

頗る有用のものかれの其全文と登載せ

○モスカルデーノ之説

モスカルデーノ(Muscordine)ハ蠶病名此症ハ原「ボトリチ

スバーシアナ」(Botrytis Parsiana)ト稱スル一種ノ蠶^{カビ}ノ所

爲ニ因ル此蠶最初ニハ蠶身ノ内部ニ生ジ逐次ニ全体ニ蔓

延シ終ニ斃死ノ殭直トナル又此症其孩^{カテルボル}蟲ノミニ限ラス既

アリ

(治法)何レノ地方ニ在リテモ設シ蠶屋中ニ此有害ナル傳

染病ノ發スルヲアルトキハ其室内ヲ清潔ナラシメ且ツ其

飼養ニ注意スル外他ノ方畧ナカルヘキナリ乃チ其糞穢並

ニ蝕餘ノ爛葉ヲ除キ丞カニ死蠶ト病蠶ヲ去リ而^{クイッキライ}ノ生石灰

ノ溶液ヲ用テ其室ノ四壁ヲ洗滌シ兼テ其極微ナル^{スポーア}無胚子

ヲ消滅スヘキ所ノ他藥ヲ用テ洗滌スヘキナリ凡ソ此病ノ

發化セル蠶房ニハナルヘキダケ交通來往ヲ絶チ其患害ヲ

避クルヲ要ス倘シ此立微ナル植物ノ無胚子アリテ葉料ニ

撒着スルキハ忽チ感染ノ合箔ノ蠶ヲ消滅セシムルニ至ル

故ニ專ラ此無胚子ヲ撲滅スルニ注意ノ怠タルヲ勿レ若シ

感染ノ實否ヲ驗セント要セハ此蠶ノ無胚子ヲ取り蠶體ニ

擦リ付ケ手早ク^{ランセット}披針ヲ以テ其網膜ヲ破リ無胚子ヲ接種ス

ルトキハ容易ニ感染スヘキ以テ知ラルヘシト謂フ

案「モスカルデーノ」ハ本邦方言シヤリ漢名白殭蠶ナリ

李中立本草原始載、蠶病風死ス、其色自白、故曰^{ヒユシダ}白殭蠶

死而不朽曰殭、此症乃チ前款ニ登記スル所ノ菌類ノ一

種「ボトリチススバーシアナ」ノ蚕體ニ生スルニ因テ發ス

ルモノナリ凡蠶病ノ尤モ慘酷ナルモノ之ヨリ甚シキハ
 ナシ其感染遞傳甚々迅速ニ僅三四日間ニ合箱皆死ス
 ルニ至ル百方之ヲ防グモ多ク其効ヲ見ズ其豫防ヲ察ス
 ルニ概ノ烟薰火烘ノ一途ニ出テズ殊ニ其病ヲ受クル源
 因ヲ悉サズ漫然其防遏ヲナサントス此其益ナキ所以今
 其病因實ニ菌類ニ發スルヲ知レハ眞正的確ノ治法ヲ
 發明スル遠カラサルヘシ次條「ポトリチス」顯微鏡圖ハ
 林度列氏藥物本草所載惜此圖甚々詳密ナラズ姑ク原圖
 ヲ摸シテ攷據ニ資ス仍異日理家白蠶蠶ヲ得テ尙詳密攷
 勘ノ其創論新說ヲ刊布セラレハ幸甚 (圖ハ畧ス)

○米國エール大學校にて、羅甸語の教授たりて、ウヰルリ
 ヤム、エ、ホートン氏の、明治九年田中文部卿(今參事院副議長)と
 共に、我邦に渡來て、東京大學に聘せられ、英文學の教授と
 あり、爾來教學に厚ク力ヲ盡されしが、此度其約滿ちて歸
 國さるゝと云ふ、氏の愷悌の君子に於て、喜怒哀樂常に其
 色に露れを、且博學多識あれば、氏の教を受けざる者ハ、何れ
 も其別と惜み、文學部第二年生發起人とあり、氏か教學の
 恩と報謝せんが爲め、聚金きて、此程九谷燒の茶器、及ひま

き畫の手箱等、本邦にて巧妙の美術品と贈られざるよし
 ○元大學理學部の教授よりし、有名なる動物博士モール
 ス氏の、此程學術實驗の爲め、再ひ我邦へ渡來せられり
 其滞在の中に、三學部の戊寅社の會員か氏と招待して、學術
 演說會を開かるゝと、又現に大學理學部の工學教授米人
 チヤプリン、及び探鑛學教授獨人チットーの両氏の、何れ
 も來月約期滿ち、歸國せらるゝよし、

○米國にて有名の詩人、ロングフェロー、及び文章家エマ
 ーソンの兩氏の、何れも此程、易簣せられり、

○光象分析のカルチヨッフ氏が發明せしものと世に傳ふ
 れど實ハ米國ペンシルバニヤ州のダウヰット、アルトル氏
 が千八百五十四年即ちカルチヨッフ氏より五年前に米國
 の學藝雜誌に試験法と登録しゝるとありといふ

○ハン氏の隕石中に生物の存在せし跡あるとと明言せら
 れしがドヂェイ、ローレンス、スミッスの數多の隕石と驗せ
 しも一ツも其跡と見ざりしといふ(以上二件チーチュル)
 ○外山正一矢田部長吉井上哲次郎の三氏にハ新体詩抄の
 編輯に従事せられ既に過半ハ出來せし由